

どんなに仕掛けても、挑発には乗ってこなかった。禁軍歩兵本隊が最前線に出て来ていた。騎兵は歩兵の後方に、幾分距離を置いて待機している。じりじりと前に押し出して来てはいるが、総攻撃という態勢ではない。陳達は、なす術がないという顔をしていた。

「頭領、これでは塚があきませんな」

董超の声にも、微かな苛立ちが感じられた。

「奴等が乗ってこないことには、公孫勝殿の策も使えん」

「それだけ慎重になっているということですか」

「それもあるだろうが、俺には、奴等が本気になった。そう感じるんだ。昨日とは違い、膚がひりつく感じがする」

「そうですね、昨日はどこかなめているようなところがありました」

陳達と董超の意見は一致していた。

「一の木戸の近くにまで引き付けないと、この策は意味がねえ。董超、いい案はないか」

董超は馬上で考え込んでいた。

「昨日の勝ちが、鮮やかすぎましたからな」

東汾山軍の歩兵の一隊が、突然禁軍歩兵隊の中に飛び込んで行った。

「誰だあれは」

陳達が驚いて言った。

「薛覇ではないでしょうか」

董超が答えた。

一隊は禁軍歩兵隊に錐のようにぶつかると、そのまま左に迂回して、背後から敵兵の最前列を襲った。しかし、禁軍歩兵隊に大きな崩れは生じなかった。

薛覇が、息を切らせて陳達の馬前にやって来た。

「頭領、駄目だ。奴等腰を据えている。ちよつとやそつとのことじゃ、びくともしやがらねえ」

「おまえ、俺の許しも得ずに、勝手に突っ込みやがったな」

陳達は、鉄管鎗の石突で薛覇の兜を打ちすえた。

薛覇は悪びれもせずに答えた。

「だって頭領、このままじゃ数に押されて一の木戸を乗り越えられませぬ。罨があるといったってこんな大勢じゃ、それも越えられちまう」

「そうだな、ひとつ賭けてみるとするか」

陳達はそう呟くと、馬首を返して後ろの兵達に叫んだ。

「おまえら、これから禁軍歩兵隊のど真ん中に突っ込む。遅れた者を待つような余裕はねえ。遅れないように、必死で俺について来い。いか、無理に敵を倒さなくてもいい。歩兵の一部を、本隊から切り離すんだ」

東汾山勢は、一斉に雄叫びを上げた。

後方から一騎、陳達に向かって駆けて来た。

「公孫勝殿」

董超が呼びかけた。

公孫勝は陳達に馬を並べると、粘土を固めた子供の頭ほどの容器を渡した。陳達は、興味深そうにその容器を眺め回した。振ると、なかに水が入っているような音がする。以外に重く、容器の口の部分も粘土で閉ざされ、油で滲みた布が垂れている。

「陳達殿、一の木戸に引き付けてから、これを使おうと思っていたが、どうやらそれは難しそうだ。策を変更して、こちらから仕掛けることにする」

公孫勝がそう言って、東汾山の兵を見渡した。

「公孫勝殿、俺もそう思って突っ込むうとしてたところさ」

「だから、私が来た」

「これを使えってことかい」

「そうだ。突っ込む前に、これを歩兵隊の中に投げ込む」

「こいつの中には何が入ってんですか」

「石油という、地から湧き出る油だ」

「石油……。話に聞いたことはあるが、見たことはねえ」

「黒く重い油だ」

「やっぱり油のように燃えるんですか」

「燃える。油よりも激しく」

「威力は」

「試してみればよい」

公孫勝は、馬に括り付けた十個ほどの容器を董超らに手渡した。

「火種はここにある。この布に火をつけたら、思い切り歩兵隊の奥に投げ入れるのだ。敵が乱れたら、一気に突入し、昨日と同じように一の木戸裏の空濠に落とす。三百ほどの兵でいい。あまり奥まで入り込むと、逆に取り囲まれてしまう。くれぐれも注意してほしい」

「分かりました。無理はせず、三百ほどを追い込みます」

董超が答えた。

「陳達殿、火を恐がる馬はいるだろうか」

「分からねえ。火の中を走らせたことがない」

「聞起と陳統を呼んでください。あの者達の馬なら、火を恐れることはないでしょう」

「公孫勝殿の馬は」

「これは、宋雪華殿の残月という馬です。借りてきました」

「どうりで立派な馬だと思った」

「私達三人が、先に火の中に飛び込みます。そうすれば、つられて他の馬も入りやすくなるはずです。乗り手が恐がらなければ、馬も安心します。どうしても恐がるようなら、無理に入らせないように」

公孫勝の言葉に、皆黙って肯いた。

聞起と陳統がやって来た。公孫勝の話を知ると、二人とも喜んだ。

「俺達五人の馬は、火の中や水の中、火薬の音にも慣れてるんだ。戦に必要なことは、起兄ちゃんと玉姉ちゃんが全部仕込んである。公孫勝の小父さん、任せてくれ」

陳統の言葉に、皆笑って肯いた。

「行くぞ」

陳達が号令をかけた。東汾山勢およそ二百が、一斉に突進を始めた。禁軍歩兵本隊の最前列にぶつかる直前、十ばかりの火がついた球が投げ込まれた。球は十列ほど後ろの兵の前に落ち、割れると同時に、凄まじい炎を広がらせた。信じられない威力だった。炎は黒い煙を上げて、地も人も、見境なく火が襲っていった。

「すげえ」

投げた東汾山兵が、呆然と火炎地獄を見詰めていた。

「今だ。聞起は左、陳統は右から進め」

公孫勝はそう叫ぶと、自らは中央に突入した。

炎の後ろの歩兵達は、我先にと背を向けて逃げ出していた。手前の歩兵達の混乱は、その比ではない。

公孫勝が一番早く、炎の海に到達した。歩兵隊の中にいた騎兵が一人、公孫勝の馬前を遮った。

「百人隊長、郭進元。賊の首を貰う」

郭進元が、大刀を舞わせて公孫勝に打ちかかった。

「とつとと退け。おまえでは役不足だ」

公孫勝の言葉に、郭進元は怒りの形相を見せた。

「首を置いてゆけ」

叫びながら、郭進元が馬を駆った。

公孫勝は、背にした短梢子※を取り出した。通常の短梢子と異なり、短棍の先には棘のついた鉄球、長棍の先には短剣がついた独特のものだった。

※短梢子 二節棍。公孫勝のものは、短棍の先に棘のついた鉄球が装備され、長棍の先にも短剣がついている。

大刀が公孫勝の胸を横薙ぎに襲った。公孫勝が僅かに体をかわして短棍の鉄球を郭進元の顔に放った。鉄球が郭進元の頬に当たり、馬上から後ろ向きに転がり落ちた。地上に仰向けに落ちた郭進元は、二度と起き上がることはなかった。

陳達が公孫勝の後を追って来た。陳達の馬は、火を恐れないようだった。聞起と陳統は、左右に分かれて混乱する歩兵を追い立てている。

続いて東汾山勢も、禁軍歩兵を一の木戸に押し込もうとしていた。

「公孫勝殿、これでは多すぎはしませんか。七百ほどになる」

陳達の顔は、やや緊張ぎみだった。

「仕方がない。ここは、李逵殿と曹瑛を信じるしかない。手に余るようなら、我々も行かねばなるまい」

公孫勝の声は淡々としていた。

火はもうもうと黒煙を上げて、いっかな鎮まる気配を見せなかった。あたりは油の臭いと肉の焦げる臭いが混じり合い、地獄のような惨状を呈していた。

二人の馬前に、騎兵が一騎駆けて来た。

「またも、奇策にやられたか。ここはもう、おまえ達の首でも取らねば収まるまい」

馬上の男が言った。興奮しているわけでもなく、むしろ冷静に事態を把握しているようだった。手には三尖刀※を持っていた。

※三尖刀 先が三つに分かれた長刀。

「ほう、また殺られに来たか。ちようどいい、相手をしてやるぜ」

陳達が鉄管鎗をしごいた。

「鳳都監を殺した賊だな。仇を討つのに手間が省けた。かかって来い」男が三尖刀を構えた。

二騎は、炎を飛び越えてぶつかかった。

陳達の鉄管鎗が、男の胸を狙った。それより速く、男の三尖刀が陳達の右腿を襲った。からくも避けたが、陳達の右腿から鮮血が迸った。

「ちっ、俺としたことが」

陳達が舌打ちした。

敵が馬首を返して陳達を襲った。重く、巧妙な刀捌きだった。陳達も鉄管鎗で応戦したが、腿に力が入らず、三尖刀をかわすのが精一杯のようだった。

「陳達殿、退かれよ」

公孫勝がそう言って、戦いの中に割って入った。

「すまねえ、公孫勝殿。腿を縛ってくる」

陳達が、あつさりと戦線を離脱した。傷は深くはなさそうだったが、三尖刀は刃先が複雑なため、思いの外流血が多く、治りもよくないことがある。今は、戦いよりも傷の手当てが先だった。

「おまえも賊か」

男が公孫勝に言った。

「おぬし、なかなかの腕だが、名のある武将か」

公孫勝の問いに、男は少し笑ったようだった。

「賊に名乗るいわれはないが、おまえは賊には見えん。名を教えよう。

経略安撫使付きの都虞侯、平真という」

「ほお、名は聞いている。優秀な武将とな」

「おまえ達に知られても、嬉しくはないな」

「私は、公孫勝。入雲竜と呼ばれている」

「聞かぬ名だな。だが、一対一で挑んで来た勇氣は認めてやろう」

平真が三尖刀を一振りした。それが始まりの合図だった。

馬と馬がすれ違った。三尖刀が空を斬っていた。

公孫勝は、短梢子を振ってさえいなかった。

平真が馬首を返した。残月も向きを変えた。再びすれ違った。

大きな金属音がして、平真の兜が地に転げ落ちた。

「やはり、いい腕だ」

公孫勝が、残月の馬首を返しながら言った。

平真は、少しの間呆然といていたが、すぐに氣を取り直して三尖刀を構えた。

「避けるのだけは上手いようだな」

平真は、そう言って残月に馬を並べた。平真の三尖刀が唸りを上げて公孫勝を襲った。公孫勝の短梢子が三尖刀を跳ね上げた。平真が、上段から公孫勝の右肩を襲った。残月の動きだけで、それをかわした。残月の動きは縦横無尽だった。公孫勝も、残月に全幅の信頼を寄せているようだった。

「何故、そんな武器を使っている。騎馬の戦いに、そんなものは普通

使わぬではないか」

平真が、本気で訊いてきた。悔し紛れというわけではなさそうだった。

「騎馬には、長柄武器。そんなことは、決まっているわけではない。どのような武器であっても、要は使う者次第だ。私には、これが合っているのだ」

公孫勝の声は、教え諭すようだった。

「しかも、一本しか使っておらぬ。背にしたもう一本は、使わぬつもりか」

平真は、少し興奮気味だった。

「別に、おぬしを馬鹿にしているわけではない。馬がよすぎるのだ。この馬とおぬしの馬では、比べ物にならない。そういうことだ」

平真は黙り込んだ。確かに格段の差があることは、二度のぶつかり合いで、十分に分かっていった。馬体も、一回り以上大きかった。

「馬がおぬしと同じなら、私も両手に短梢子を持っていただろう。さあ、もういいだろう。今回の戦の勝負はついている。無用な争いをして仕方がない」

公孫勝は、そう言い残して残月と共に引き返して行った。炎の上を、それは鵬のような美しさだった。見事な馬だ。平真は、自らの負けも忘れて残月の後ろ姿を見送っていた。

・・・

陽はもう西に傾き、低いとはいえ、山の涼風が肌を感じられるようになってきた。平真は気持ちの晴れぬまま、杜愔の幕舎を訪ねた。

「経略使様、平真です」

「入れ」

杜愔の声に棘はなかった。中に入ると、杜愔が牀よりも大きい桌の上に、地図を広げて考え込んでいるところだった。

「策を練っているところでしたか」

平真が遠慮がちに言った。

「策はない」

杜愔の声は、むしろ楽しそうだった。

「ありませんか」

「けして大きな砦ではないが、実によく出来ておる。ここを砦に選んだ者は、この地形そのものが堅固な要塞であることを、十分理解しておったのだろう。こちら側から見ても右側は、複雑に入り組んだ森になっておるし、左側は少し林があるだけで、その先は崖になっておる。つまり、左右の守りは考えなくともよいということだ」

「その左手の林には、数え切れないほどの罾が仕掛けられております」「兵を遣ったのか」

杜愔が呆れたように言った。

「はい、五名ほど。叢くさむらに隠された紐ひもに掛かって、木の上から矢が降つてきました。幸い勢いが弱く、死んだ兵はいませんでした。左側の林を抜けるのは極めて困難と言わざるを得ません」

「そうか、兵を死なせずに済んでよかった。もう、罾あはを暴あはこうとせんでもよい。右側も兵を入れることは出来んのだな」

「実際に見ていただければお分かりになられると思いますが、下した生はえが多く、馬も人も踏み入ることは難しいと思います」

「今更伐採しても遅いしな」

「はい。とても数十日では足りません」

「裏側は」

杜愔が、不意に平真の目を覗き込んだ。

「砦への道があるのかは、まだはつきりとしておりません」

「探ってはおるのだな」

「まだ、一人も戻っておりません」

平真が偵察に出したのは二十人だった。もう三日経つというのに、誰一人復命した者はなかった。

「どうやら、そのあたりが奴らの弱みと言えそうだな」

「ですが、短期間ではそこを攻めることは出来ないと思われま



「これを見ろ」

杜愔が、広げた地図の一点を指した。

地図はかなり詳細なもので、太原府を中心に汾水、亀伏山を始め、東汾山も画かれていた。

「この亀伏山の裏、南の赤岩山の間、どうやら小さな集落がありそうなのだ」

「集落」

「と呼べるものは分からぬが、ここに何もないと考える方が不自然と言える」

「そうですね。あの周到な砦を見ても、どこかに補給基地を置いていることは十分に考えられる」

「それだけではない。おまえと戦った相手。どこから現れたか考えると、砦の裏手からとしか思えぬ」

「公孫勝という男でした」

「そんな男は、これまでの調べでは出てきておらん。だから、新しく加わったということだ。山の周辺には、封鎖の部隊を展開しておく。

東汾山の山賊以外、今のところ山に入った形跡はない。その中に、その男らしき報せはない」

「東汾山の賊を調べたのですか」

「奴等に詳しい兵に確認させた。東汾山の一味ではなさそうだ」

「それなら、もともとここにいたということか」

「あるいは、山の中の何処かにいたかだ。それにしても平真、おまえと互角にやり合うとは、その男見事な腕前だな」

杜愔の言葉には、微かな驚きが混じり込んでいた。

「いえ、あの男は私を殺さなかったのです。命を取られても仕方がないほどの腕でした。何故かは分かりませんが、兜だけを落として去って行きました」

今度は、杜愔も本当に驚いたようだった。

「おまえが負けたというのか。信じられん。馮湧の鎗、おまえの三尖刀、太原府屯駐禁軍※の二枚看板ではないか」

※ 屯駐禁軍 駐屯禁軍と同じ。

「それはおおげさですが、とにかく負けたことには変わりありません」  
「それほどの腕か」

「格が違う。そのように感じました。鳳都監を倒した、東汾山の草頭もなかなかの腕でした。とても、山賊風情とは思われません」

「倒さなかったようだな」

「殺すには惜しい。そう思ってしまった」

平真は、杜愔に罰を受ける覚悟で打ち明けた。

「將軍、罰は覚悟のうえです」

杜愔が、手を叩いて笑い出した。

「平真、おまえにも友が出来るかもしれぬな。よいのだ、それで」

平真が面食らったような顔をした。

「儂が熙州におったことは聞いておろう。もう三十歳近く昔の話だ」

熙州といえ、西夏国境の蘭州からすぐ南だった。杜愔が若い頃、熙州駐屯禁軍の將軍をしていたことは聞いていた。

「ある時、秦鳳路の経略安撫使が病で亡くなってな、それを知った西夏軍が、ここぞとばかりに大攻勢をかけて来たのだ。その数十万と公称しておったが、実のところは五万というところだった。だが、あの勇猛な西夏軍だ。こちらは、蘭州軍と併せても三万がやっとだ。秦州、岷州に救援を頼んだが、とても間に合いそうになかった。儂らは、全員玉砕の覚悟で戦を待った。侵攻はあつという間だった。蘭州の手前に砦を構え、そこを基点として、秦州や渭州に侵攻していったのだ。蘭州と熙州には、さほどの攻撃はしてこなかった。秦州は大混乱に陥り、渭州、岷州も自分のところで手一杯といった状態だった。このままでは秦鳳路を獲られる。儂らはそう思って、何とか蘭州手前の砦を攻略しようとした」

「砦、ですか」

「そうだ、周りの様子はかなり違うが、砦を落とす戦いだ。儂はな、この度の戦いを始めた時から、あの頃のことを思い返しておったのだ」

杜愔はそう言って、どこか遠くを見るような目をした。

「大変な戦いだっただことは、想像が付きませぬ」

平真が言った。西夏軍五万である。西夏の兵は、宋軍三兵にあたると言っても過言ではない。もともと、宋軍の質にもよるが。

「決死の戦いだっただ。儂ら、熙州と蘭州の軍は、砦だけに集中して攻撃した。あらゆる手を尽くし、一週間の攻防の後、ついに砦の守備隊長が一对一の決闘を申し出た。さすがの西夏軍も、兵糧が尽きかけておっただ。儂らは、とにかく兵站を切ることに専念したのでな」

「それが最も効果的だと思います」  
平真が賛同した。

「急造の砦だったし、このように木や草もない。特に水に苦しんだようだった。それを打開するために、一对一の戦いを求めたのだ。おまえも知っての通り、西夏軍はあまり輜重車※を使わない。遼なども、兵糧は敵から奪うものと考えておる」※輜重車 兵糧を運ぶ車。

「打草穀※と書いておりますから」

※打草穀 契丹人が敵地で食料や飼料を奪うこと。

遼では、兵士が打草穀のための下僕を、一人用意する必要があった。

平真が頷いた。

「二三日で、儂らが音を上げると踏んでおっただろう。安撫使が死んで、士気が落ちていると思っただろう。だが、実際は逆だった。賄賂にばかり熱心な安撫使でな、兵の鍛錬などどこ吹く風だった。治安も乱れに乱れておっただ。心ある都監が諫言すると、それを根に持つてどこかに更迭するなど日常茶飯のことだった」

「では、安撫使が亡くなられて、逆に士気が高まったと」

「その通りだ。邪魔な安撫使がいなくなつて、儂らは思いのまま戦うことが出来るようになったのだ。儂らは、徹底抗戦の道を選んだのだ。秦州、渭州、岷州でも、都監を中心として同じように立ち上がった。西夏はあてがはずれたわけだ。四五日すると、他の州を襲っていた西夏軍は撤退した。だが、蘭州手前の砦の軍は退き下がらなかつた。誇りが撤退を許さなかつたのだらう」

杜愔は、そこで小さな溜息をついた。

「それだけの兵糧しかなかったとしますと、餓死者も続出したのでは」  
平真が訊いた。

「そうだ、砦を守っていたのはおよそ一万だったが、その半数は餓死したようだった。残りの兵も、戦いなど出来ぬ様子だった。だからこそ、一騎討ちを挑んできたのだろう」

「受けたのですか」

「受けた。古株の都監の中には、一騎討ちなどせずに、兵糧攻めを続けた方がいいと言う者も多かったが、儂ら若い都監が押し切った。敵の求めに応じないことを、潔く思わなかったのだ。今思えば、汗顔の至りだ。とにかく、若手の都監の中から儂が選ばれた」

「そこまでは知りませんでした」

「ここまで話すのは、平真、おまえが初めてだ」

平真は身を正した。

「砦から一人の将軍が進み出た。大きな身体ではなかったが、しなやかな、そう、豹のように精悍な将軍だった。その将軍は、一騎討ちに応じてくれたことに感謝すると言った。驚いたことに、漢人だったのだ。今でこそ、遼や西夏にも漢人の将軍が増えたが、あの頃はまだ珍しかったのだ」

「そうですね。特に遼には、漢人の武将が多いと聞いております」

「儂はものも言わずに突進した。勝てないかもしれない。一目見た時から、そう悟ったのだ」

「ですが、勝った。そうでなければ、将軍は今ここにおられません」  
平真の言葉に杜愔は答えず、暫く目を閉じて、想いに浸っていたようだった。

「勝ちを譲ってもらったのだ」

「譲ってもらった……」

「そうだ。砦の将軍は、明らかに儂より腕がたつた。誰が見ても、十合もせずに儂が斬られると思っただろう。餓えてはいても、鬪気に翳りはなかった。凄まじい大刀の冴えだった。だが、十合ほど打ち合っ

た後、将軍が儂に言ったのだ。兵達を見逃してくれとな。自分達西夏の将軍が策を誤った。責任は、ひとえに自分達にあるとな。兵達は自分達将軍についてきただけだとな」

「ですが、西夏の兵も宋兵を殺します。虫のいい話では」

平真が、憤慨したように言った。すっかり杜愔の話に取り込まれたようだった。

「つきつめて言えば、その通りだろう。だが、おまえにも分かるはずだ。死力を尽くして戦った相手への思いが」

平信は、うっと言葉を詰まらせた。

「儂は、何故か肯いていた。その時には、儂はその将軍に、尊敬にも似た気持ちを抱いていた」

「分かるような気がします」

以前の自分なら、そんなことは甘いとい蹴するだろう。平真は、何かしら今までと違う心持ちになっていた。

「儂の返事を確認すると、将軍は儂に言った。友よ、ありがとうとな。その直後だ、将軍が自刎したのは。自らの大刀で、一気に自らの首を刎ねた」

平真は息を呑んでいた。

「儂の人生の中で、誰か一人だけを友として選べと言われたなら、儂は、あの西夏の将軍の名を出すだろう」

杜愔は、やや話し疲れたとでもいうように、牀に腰をおろした。

「何故私に、そのような大切な思い出を……」

平真が、真剣な顔で訊いた。

杜愔は、ふっと小さな溜息をついた。

「どうしてかな。この戦が、儂に昔を思い出させたのかもしれない。あるいは、おまえがあの将軍に似て来たと思えたのかもしれない」

「そんな、私ごときが……」

「だが、おまえは陳達という賊を殺さなかった。また公孫勝という者も、おまえを殺さなかった。そこにあった気持ちは、あの時の儂らと同じものだったと思うがな」

平真は、何も答えることが出来なかった。

「まあよい。人を滅ぼす武よりも、人を活かす武の方が尊い。それだけ、忘れないでくれ。明日からは、儂が前線に出る。今日は早く休むことだ」

杜愔はそう最後に言っつて、桌の上の地図に目を遣った。

「失礼します」

そう言っつて平真は、杜愔の幕舎を後にした。

頭の中は、まだ混乱していた。杜愔の言葉が、切れ切れに頭の中で踊っていた。どうして私なんかに話したのだろう。平真は杜愔を、第二の父のように思っつていた。本当の父は、平真が十六の時に死んだ。休むことの出来ない畑仕事で身体を壊したのだった。父は、一日も休まず仕事に精を出っつていた。だが、いつも家は貧しかった。佃戸※として、その一生を終えた父を思い出す度に、人の生き方とは何なのかと疑問を抱くことが多かつた。働いても働いても、豊かにならなかつた父の生涯。努力が報われることの少ない世の中。平真には、どうしても受け入れることが出来なかつた。そして今、自分はそうしつた世を護る側に立っつている。父を失つた家を守るため、農を捨てて一兵卒として廂軍に入り、たまたま認められて禁軍都監の小者に抜擢された。それから努力を重ね、書を読み、武を研鑽し、ここまでになつた。特に、杜愔には重用された。その心の片隅に、報われることなく人生を終えた父の倅があつた。父の命は、国や新興地主層である形勢戸に吸い尽くされた。そうしつた思いを抱いたこともあつた。母も五年前に世を去り、兄弟も病で他界しつていた。家族はいない。自分の人生とは、そう考へることが多くなつていた。※佃戸 小作人。

「晒した兵を解放してやれ」

平真は、見張りの兵に告げた。軍規は厳しくするが、決してやりすぎない。それが平真のやり方だった。

「人を活かす武か」

平真は、暮れつつある山の稜線を見続けていた。

・  
・  
・

今日の戦いにも勝った。公孫勝は胸を撫で下ろしていた。李逵が、公孫勝のそんな様子を見て、あつむ勞わるような表情を見せた。

「だんだん手強くなるな」

李逵が呟いた。

「その通りだ。畏に嵌めるのは、もう難しいかもしれない」

公孫勝も樂觀はしていなかった。

「このままいくと……」

李逵が言葉を濁した。

「だが、もたせねばならぬ」

公孫勝の声に、迷いはなかった。

東汾山勢の犠牲は三十人ほどだった。それも、ほとんどが今日の戦でだった。怪我で動けない者も、ほぼ同数になる。まともに戦える者は、およそ二百六十、そんなところだった。

「奴等の方が被害は大きいが、それでもかすり傷程度にしかこたえておらんだろう。こっちは、片腕をもぎ取られたようだがな」

言葉とはうらはらに、李逵の声には力が漲たぎっていた。

「李逵殿、やはり決定的な打撃が必要だ」

「あれか。賛成は出来ん。たとえ成功しても、行った者は確実に死ぬ」

「私であれば」

公孫勝は引き下がらなかった。もともと、その策があつて二十日もたせようとしていたのだった。

「どうしてもというなら、儂が行く」

李逵が断言した。

「広い戦場で、思い切り戦うのであれば、李逵殿の右に出る者はいないと思う。だが、これはそういうものではない。目立つ者では駄目なのだ。忍び込むことを考えれば、私か時遷ときせん、どちらかしかないのだ」

李逵は肯うなんじなかった。

「その話はもう、なしにしよう。たとえ成功しても、禁軍が退くかど

うかは分からん」

「やってみる価値はある」

公孫勝が静かに言った。

陳達がやって来た。

「公孫勝殿、迷惑をおかけして済みませんでした」

陳達が軽く礼をした。

「痛みは」

「それが、あまり痛まないんですよ」

「あの男の腕がいいからだ。わざと傷を広げないように突いている。本来、三尖刀とは叩き斬るものだ。それを軽く突くだけにしてある。

何かわけでもあるのか、陳達殿を助けたと言えなくもない」

「あいつが、何で俺を助けるんだろう。確かに、殺されてもおかしくはなかったがな」

「分からん。とにかく、血の量に比べて傷は小さい。治りも早い」

「助かるぜ。こんな大事な時に、いつまでも動けないではたまつたもんじゃない」

陳達は、そう深く詮索するつもりはないようだ。

「くれぐれも、そんなことを黄玉の前で言わないでほしい。たださえ、牀の上で焦れているというのに」

公孫勝の言葉に、李達が含み笑いを漏らした。

「あの別嬪さんかい。確かにいらついているようだったな」

「公孫勝殿は黄玉を見ていないのか」

李達だった。

「会えば、言われることは分かりきっている。傷の方は、曹瑛に任せて大丈夫だ。後は、糸を抜く時だけ私がいればよい。宋雪華殿は別だが」

「そういえば、さつきその娘さんに会ってきたが、あれは大した娘さんだ。俺達のことを随分と気遣ってくれて、俺の怪我も心配してくれていた。あの娘さんの方が、よっぽどひどい目に遭ってるっていうのに」



「それが嬢さんだ」

李逵は、満足そうな表情をした。

「明日からはどうする」

李逵の問いかけだった。

「陳達殿がこのようでは、今までと同じというわけにはいかない。敵の出入にもよるが、守りを固めるしかない。後は聞起と陳統に、兵站をかき回してもらおうといったところだ」

「やはり、そのくらいしか手はないか」

公孫勝の言葉に、李逵も同意した。

「東汾山勢は、出来るだけ一の木戸まで敵を引き付けてもらいたい」「攻めないんですか」

陳達は不満そうだ。

「この人数で攻めても、敵に包囲されるのが関の山だ。一の木戸の近くまで誘えたら、火炎球が使える」

「あの、おっかねえ火の玉ですか」

公孫勝が肯いた。

「李逵殿の部隊は、一の木戸の上から火炎球を投げられるようにしてください」

「分かった。あの玉は、どのくらいある」

「百はあります。馬上で火をつけて投げるのは難しいが、木戸の上から投げるのは容易です。特別な練習もいらないうでしょう」

「百もあれば、暫くはもちそうだな」

「合間に、檣木や落石も使えばですが」

李逵が頷いた。

「聞起と陳統には、私の方から指示を出します」

李逵が少し心配そうな顔をした。

「危険な目に遭わせたくはないが……」

「李逵殿の気持ちは分かるが、これは戦だ。このような絶対的に数の差がある戦では、使えるものは総て使わなくては、もちこたえることなど出来ない。それに、あの二人は、もう十分大人だと思うが」

「それは分かっているのだが……」

「李達殿には、一の木戸を守ってもらわなくてはならない」

李達は黙って肯いた。二人がもう大人以上のことは、頭では十分理解している。しかし、宋家村で共に暮らした三歳を思うと、どうしても失いたくない気持ち先に出て来るのだった。

「大丈夫だ、李達殿。私達がしつかりしていれば、二人が死ぬことはない。そう信じるのだ」

「そうだな、公孫勝殿。よけいなことを言って済まなかった」

李達はそう言っ、一の木戸の方を眺めた。夜の闇を押しつけて、燃え盛る篝火の炎が、何かを語りかけているように李達には思えた。

・・・

蔡京は、宰相府※の広大な邸宅の一室で書見をしていた。一人になりたいた時はたいてい、この静かな離れで書見をすることにしていた。母屋とは穿廊でつながってはいたが、家族はほとんどこの離れに近寄ることがなく、たまに小者が掃除をしに来るだけだ。特に夜ともなれば、開封府の喧騒も届かず、聞こえる物音は、池の鯉が何事かに驚いて飛び跳ねる音だけだった。

※宰相府 開封府内城の、宰相が住む邸宅のある区域。

離れの左隅で、小さな物音がした。燭台の火をかざすと、胡桃が一つ落ちていた。

「王倫か」

「はい」

「あいかわらず、気配一つ感じさせぬな」

「宰相様の警護、もう少しましな者達を使いませんと」

「これでも選りすぐったのだが」

「一人二人殺しておきましょうか。少しは気が締まると思えますが」

「よい。この宰相府に忍び込めるのは、おまえとその仲間だけだろうからな」

「そんなことはありません。この国は大きい、どんな者が野にひそんでいるか分かりません」

「僕ももう六十六だ。この国を支えておるといふ気概がなければ、とつくに死んでおつてもおかしくはない」

「そんな弱気なことを申されるな。宰相様に死なれたら、私の生きがいがなくなるではありませんか」

「おまえの生きがいか。この仕事が好きなのか」

「これ以上、私に合う仕事は考えられませんな」

「そうなのか」

「はい」

蔡京は、窓の外に向かって話しかけていた。遠くに不夜城たる開封府の街の灯りが見えてはいるが、離れの窓の外は、漆黒の闇が淀んでいるだけだった。

「用件は何だ」

蔡京の目が細くなった。言葉も鋭いものになっていた。六旬むくじゆん※を過ぎた老人とは、とても思えなかった。※六旬 六十歳。

「太原府……」

窓からの声も、急にひそやかなものになっていた。

「太原府……。そういえば昨日、知府の黄文柄から報せが来ていたようだな」

「お聞きになれましたか」

「いや、聞いてない。黄文柄は無用に騒ぎ立てるところがあるのでな」

「叛乱はんらんの芽かもしれませぬ」

声は、ますます低くなっている。

「叛乱の芽……何故だ」

蔡京の目が、より鋭いものになっていた。

「太原府禁軍の都監が二人、殺されました」

「都監が二人だと。誰がそのようなことを」

「黒旋風。三年前に姿を消した、あの銅堤山の黒旋風です」

声は低かったが、この静寂の中では、聞き取り難いということはない

かった。

「銅堤山の黒旋風……。死んだのではなかったのか」

「違ったようです。思わぬところにひそんでおりました」

「どこに」

「宋家村」

「宋家村……聞かぬな」

「太原府の西の小さな村です」

「何か特別な村なのか」

「特別といえば、そう言えるかもしれませんが」

「どうということだ」

「三年前、遼の脱走兵に襲われて壊滅的な打撃を受けていたのですが、一年ほどで復興し、以前の何倍も豊かな村になったという話です」

「そんな話は聞いたことがないな」

「遼と西夏との交易が成功したようです」

「遼と西夏か。塩とか銅ではないのか」

「遼はともかく、西夏には塩田が多くあります。絹織物や陶磁器やらの日用品がほとんどです。穀物もですが」

「厳しいことを言えば、絹は禁制だがな」

「そんなことを言ってしまったら、宋の大商人は全員極刑でしょうな」

「それはそうだが。他には」

「西夏には、儒教や釈教の経典を運んでいるようです」

「政体や史実の書はないのだな」

「それはないようです」

「まともな交易で、そこまでの復興を果たしたのか」

蔡京は腕を組んで、しばし目を閉じていた。

「古着なども、良質な品を、格段に求めやすい値で交易しているようです。おそらく、仕入れに優秀な人材がいるのでしょう」

「思い出した。宋家党とかいう若者の集団だな」

「そうです。賊に殺された保正せうの娘が束ねている集団です」

「宋家党の仲間は割れているのか」

「いえ、まだ全員は。中心の宋雪華、遼にいた聞起という若者と黄玉という娘、それに太原府にいた曹瑛という娘。ここまでしか分かっておりません」

「それが、何故黒旋風と関りがあるのだ」

「太原府の大商人、魯權が宋家村の交易を奪おうとしたのです。それも相当にあくどいやり方で」

「魯權か。何度か会ってはいるが、あ奴のやりそうなことだ」

「それに知府が乗った。そして、宋雪華を拷問にかけたのです」

「馬鹿者が。欲をかくからだ」

「肌を焼いたようです」

「まだ若い娘なのだろう」

「酷い仕打ちです」

「そうだな」

蔡京は、まだ目を閉じたままだった。

「おまえ達ならどうした」

ぽつりと、蔡京が言った。

「もし叛乱を起こしそうなら、拷問などいたしません」

「殺すのか」

「はい」

窓からの声には、何の躊躇いも混じっていないなかった。

「その娘を助け出すために、黒旋風が動いたのだな」

「宋家党の若者達も」

「何故、太原府禁軍が動いた」

「知府が動かしました」

「黄文柄の馬鹿者が」

蔡京は、手にした筆を投げつけた。

「だが、その程度では叛乱とは結びつかぬな」

「遼軍が動きました」

「真か」

蔡京が目を見開いた。

「遼軍といつても、女真族の小隊です」

「完顔部、確か阿骨打という者が族長だったな」

「その小隊が、禁軍を文字通り蹴散らしました。阿骨打の弟の呉乞買が指揮を執っていました」

「弟がいるのか」

「もともと阿骨打には、兄も弟もおりません。兄の烏雅束については調べがついておりませんが、弟の呉乞買は阿骨打以上の弓の達人です」

「ということは、いずれ力をつけて来るということだな」

「はい。彼等騎馬民族にとって、武こそそのよりどころですから」

「だが、宋雪華が捕えられたくらいで、何故遼軍が動くのだ」

「そこまではまだ」

窓からの声は、そこで黙り込んでしまった。

「分かった。明日童貫に言って、兵を出してもらおう」

「童枢密使※にですか。となると、開封府禁軍を動かすことに」

※枢密使 宋の軍事最高責任者。主に禁軍を束ねる。

「童貫と儂は、一蓮托生の仲だ。この国を守ること、それが儂らの安泰につながるのだ」

「国と御自分と、どちらかを取るとしたら」

窓からの声には、たつぷりと皮肉が込められていた。

蔡京は口の端を少し挙げただけで、それには答えなかった。

「おまえは、仕えて何歳になる」

「十五年にはなるかと」

「そんなになるか。おまえも一度は科挙を志した男だろう。何故この道を選んだ」

「性に合っております。科挙にたとえ合格していても、ここまで楽しい仕事にはありつけなかったでしょう」

「そういうものか。影であることに満足しておるのか」

「はい。影だからこそ出来ることに満足しています」

「まさか、儂を裏切ることはあるまいな」

「宰相様の仕事に、満足しております」

「とにかく、宋家党と遼とのつながりを、早くつかまえることだ」  
「気になられますか」

「あたりまえだ。遼はたてまえだけは弟だが、やることなすこと総て兄として振舞っておる。その遼が、また何かを企んでおるのかもしれないのだぞ」

「澶淵の盟ですか。仕方ないではありませんか。誰が見ても、遼に頭を下げて和を請うたのはこの宋です。たてまえでは宋が兄ですが、他国も宋の民も、誰もが遼を兄と見ております。遼など、宋の帝のこゝとを童子皇帝と侮蔑しております。だいたい、兄が弟に歳幣を贈るなどということなどありますまい」

「仕方がなかったのだ。あのままいけば、宋という国はなかっただろう。銭で買った和平と侮辱されようとも、儂は、あの頃の廷臣の決断は間違っていないかったと思う」

「それも、一つの見識とは思いますが」

「その遼が絡んでいるとすれば、これは重大な事態になりかねん」  
「私もそう思います」

「王倫、おまえの黒死軍で黒旋風を殺れるか」

暫く返事はなかった。やがて、窓から声が流れた。

「宰相様、確約は出来ません」

「おまえでも駄目か。黒旋風とはそこまで強いのか」

「人とは思えません。ですが、我ら黒死軍の中にも、人とは思えぬ者が少なからずおります。やるだけはやってみます」

「それでよい。宋雪華は、出来る限り生かして連れて来い。聞きたいことがある」

「うけたまわりました」

「黒死軍の歳費を倍にしておく」

「ありがとうございます。既に、太原府にいた部隊は動いております」

「誰が指揮官だ」

「蝙蝠が」

蔡京は、一瞬嫌そうな顔をした。

「あの男か」

「残忍ですが、腕は立ちます。この仕事には適任かと」

「いいだろう。ところで、奴等はどこにいるのだ」

「太原府の南。亀伏山の砦に」

蔡京が、桌の上の硯を落とした。顔は青ざめ、指は震えている。

「亀伏山……」

「宰相様、どうかなされましたか」

窓からの声は、初めて真剣なものに変わっていた。

「いや……何でもない」

蔡京は、頭を抱えて桌にうつ伏した。その両手は微かに震え、筆が踊る音まで聞こえて来そうだった。